



地球規模の教養：秋田蘭画ストーリー

阿 部 邦 子

(国際教養大学 アジア地域研究連携機構 准教授)

1 はじめに

江戸時代の秋田蘭画を巡る知識・文化水準の高さは、世界中を旅するイメージと秋田蘭画の繋がりを知ると良くわかる。芸術の華が開花したルネッサンス期のイタリアのフィレンツェと比較し得る。これが、私の提案する、「世界の中の秋田蘭画」という地球規模の秋田蘭画ストーリーだ。

図1 佐竹曙山筆 二重螺旋階段図 秋田市立千秋美術館蔵



私と秋田蘭画との出会いは、有名な花鳥風景画ではなく、取り上げられることが殆ど無い建築のパースの如きもの（図1）だ。DNAのような二重螺旋階段の平面図とパースが同じ一枚の紙に作図されたものを見て驚いた。参考図録には解説が無かったが、元図は西洋建築史に登場する16世紀のイタリア人建築家ヴィニョーラによるものと確信をもった。二重螺旋階段の実例としてはルネッサンス期の巨匠レオナルド・ダ・ヴィンチがデザインしたフランスのシャン

ボール城の二重螺旋階段が有名だ。しかし、どうしてイタリアの建築家による二重螺旋階段図の模写が、秋田にあるのだろう。その謎を解くべく、秋田蘭画研究がはじまった。

2 秋田蘭画とは

秋田蘭画とは江戸期の秋田藩士による阿蘭陀風（おらんだふう）の絵画であるが、長い間忘れ去られていた。主要画家には藩士の小田野直武、また藩主の佐竹曙山がいる。再発見されたのは今から百年あまり前。この秋田蘭画を日本で初めて体系付けて評価したのは日本画家の平福百穂（ひらふくひゃくすい）である。画伯は自ら三十年にわたって研究を重ね、その集大成として秋田蘭画に関する『日本洋画の曙光』という大書を1930年に刊行した。戦後まもなく、小田野直武筆の「不忍池図」（しのばずのいけず）が発見され、1968年に重要文化財に指定されると、秋田蘭画への関心が高まった。江戸時代の博物学、そしてレンズ到来による視覚革命という視点での近年の秋田蘭画研究の成果には目覚しいものがある。最近では、2016年に東京のサントリー美術館で「世界に挑んだ7年 小田野直武と秋田蘭画」展が開催された。東京での秋田蘭画展の開催は十六年ぶりだった。この展覧会が新たな秋田蘭画旋風を巻き起こし、秋田蘭画の不思議さ、そしてその独特な面白さを再発見する機会になった。

秋田蘭画誕生の経緯はどのようなものだったのか。時は江戸後期18世紀後半。蘭学たけなわの時代。秋田藩の若き武士達は海を渡ってヨーロッパからやってきた博物図譜や銅版画に出会う。驚くとともに魅了され、陰影法・遠近法を独学で学び、日本初の洋風画を描いた。実際は和様・唐様・西洋の折衷だったといえる。和様は狩野派等の日本の伝統、唐様は当時中国から到来した花鳥画を中心とする南蘋派（なんびんは）の影響。吉祥性と華麗さを備える。西洋は、陰影法・遠近法を用いた真に迫る写実性。この三つの結びつきがまったく新しい独特な絵の世界を作り上げた。油絵ではなく日本の伝統的な画材を用い、また当時輸入された鮮やかな色相を特徴とするプルシャンブルーを取り入れている。これが秋田蘭画である。佐竹曙山筆「松に唐鳥図」（図2）に代表される、大胆な構図と奥行きを感じさせる不思議な空間、清涼感を湛えたプルシャンブルーの青い空。このような珠玉の名作の数々がその輝きを失うこと無く今日も凛とした気品を保っている。

さて、前述の秋田藩士の画家を代表するのが小田野直武である。生地の秋田県角館で平賀源内に出会い江戸へ赴く。到着後すぐに杉田玄白訳の『解体新書（かいたいしんしょ）』の挿絵（図3）を制作し、時代の最先端に行く知識人と交流した。異色なのが秋田藩主であり画家の佐竹曙山。いわゆる蘭癖大名（らんぺきだいみょう）の一人だった。狩野派を学び、洋風画は家臣の小田野直武から手ほどきを受けた。

しかし秋田蘭画を悲劇が襲う。平賀源内が獄中死すると追う様に小田野直武が32歳という若さで謎の死を遂げ、また佐竹曙山も38歳で亡くなる。その後間もなく秋田藩士による蘭画は絶えてしまう。秋田蘭画は短命だった。だがこの挑戦的な秋田蘭画は小田野直武の弟子ともいえ

る司馬江漢などに継承され江戸の洋風画へと大きく発展していく。ひいては浮世絵の北斎・広重にその流れが汲み取られていく。とくに秋田蘭画の構図は、19世紀後半のヨーロッパの印象派の画家たち、モネやロートレックやゴッホ（図4）たちに、絵画的視覚革命を起こした。ここに秋田蘭画の歴史的意義がある。

図2 佐竹曙山筆 松に唐鳥図 個人蔵



図3 小田野直武筆 解体新書 附図 国会図書館蔵



図4 ゴッホ作 種蒔く人 ゴッホ美術館蔵



しかし、秋田蘭画のイメージソースには未だにミステリーが多い。私の秋田蘭画の謎解きの迷宮を巡っての旅の行先は、まず冒頭で紹介した佐竹曙山が模写した「二重螺旋階段図」の建造例があるフランスのシャンボール城だった。レオナルド・ダ・ヴィンチ考案の二重螺旋階段を備えており、ユネスコ世界遺産となっている。「世界の中の秋田蘭画」の位置を見据えると、その地球規模のひろがりとは時空を越えて想像だにできなかったものと結びつく。

3 曙山・直武所持舶載銅版画集『海の神々・女神達』とデンマーク王宮

秋田蘭画のミステリーを追いかけて、北欧のデンマークの城に辿りついた。大槻玄沢著『六物新志』（1786年）によると小田野直武は人魚の絵を描いている。創意の源はどこにあったのか。この謎を解く一つの鍵が、デンマークの王宮フレデリクスボー城にあった。アンデルセンの人魚像でも知られる首都コペンハーゲンの郊外にこの美しい城がある。現在城館は国立歴史博物館（図5）となっている。城は広大な湖に浮かぶ三つの小島の上に建てられている。デンマークが世界に誇る文化遺産だ。

図5 フレデリクスボー城国立歴史博物館 筆者撮影



城の前庭の大理石回廊は立像彫刻と浮彫り彫刻とで豪華壮麗に装飾されている。浮彫りのテーマは海神達。オランダの建築家ケイセルにより考案された。装飾テーマは先ずは宇宙の神秘的調和を象徴する七つの惑星でギリシャ・ローマ神話の七神の立像となっている。そして、地上を支配する王の権力を象徴するものが、浮彫りのモチーフとなった人魚も含む海神達の姿である。マルス、ガラテア、プロセルピナ等が登場する。

ケイセルの図をもとに銅版画が彫られ、人魚風のモチーフ等を使った浮彫り用図案集『海の

神々・女神達』(図6)が十二点一組の銅版画で出版(1620年頃)された。この銅版画が秋田蘭画とデンマークの王宮を結びつけた。

図6 ケイセル原図銅版画集 海の神々・女神達
表紙 アムステルダム国立美術館蔵



図7 ケイセル原案銅版画 軍神マルス 佐竹曙山
写生帖 秋田市立千秋美術館蔵



図8 ケイセル原案浮彫り 軍神マルス フレデリクスボー城大理石回廊 デンマーク・フレデリクスボー国立歴史博物館蔵



日本で初めて西洋画論を書いた秋田藩主で画家であった佐竹曙山、その家臣で秋田蘭画のバイオニアの画家が小田野直武、なんとこの両名が銅版画集『海の神々・女神達』を所有してい

たのだ。この十二点の版画連作の内六点が曙山の「写生帖」第三冊(秋田市立千秋美術館蔵)(図7)、三点が小田野直武の「写生帖」第三冊(個人蔵)に収められている。残りの三点は欠落している。この曙山の手の中に入った銅版画は曙山の構想のもとに論理的に編成され、未完成に終わった写生帖に収められており、曙山が非常に大切にしていた様子がうかがえる。

城の大理石回廊のオリジナルの彫刻装飾は19世紀の大火により破壊された。唯一難を逃れた浮彫りが、城内の国立歴史博物館に保管されている(図8)。よって17世紀初頭の完成当時のオリジナルの装飾を知るにはこの曙山と直武が所蔵していた銅版画が著しく重要になってくる。世界中でも完全に十二点揃ったオリジナルの銅版画は稀有で、美術館所蔵としてはオランダ国立美術館の二組(不完全)、そしてイギリスのヴィクトリア・アルバート美術館の一組(不完全)であろうと思われる。面会した国立歴史博物館の主任学芸員によると博物館にはオリジナルの銅版画は保存されていないとのことだった。

4 佐竹曙山使用の蘭語印をめぐって

曙山は書画や和歌の為の印章と印譜を百顆以上使用している。このうち確実に分かっているものとして、四種類五顆が蘭語印である。Segutter vol Beminnenと刻まれた二種類の印(図9①、②)。Sの飾り文字のあるSiozan Signetという印(同③)。立体的に描かれた三脚蓋つき丸つぼにSiozan Schildereijという印(同④)。ケイセルの海神図案の中に見つかるイルカの図と海草のような模様を組み合わせたとされるZwaar Witという印(同⑤)(図10のケイセル原案銅版画のガラテアの中のイルカ2頭の尾の形に似る)。

図9 佐竹曙山使用蘭語印四種類五顆 筆者CG再現



図10 ケイセル原案銅版画 ガラテアとイルカ
アムステルダム国立美術館蔵



①と②を除く三種の蘭語印は曙山自身が原案を描き印を造らせた。④の蘭語印の原案は平福百穂による日本初の秋田蘭画に関する著書『日本洋画の曙光』(1930年刊)掲載の曙山筆の模写図の右端に小さくみつかると。残念ながら今日この図は紛失したとされている。

曙山作に「湖山風景図」(図11)という、透視図法を取り入れた不思議な作品がある。水平線上に山並みの影が湖面に映り、雲を背景として飛ぶ鳥の群れが見え、また前景から立ち上がった木が影をつくるフレーミングとなっている。左側前景に人影がみえる。この構図は、小田野直武の写生帖に収められ、「古城のある風景図」と呼ばれている舶載銅版画の構図に似る。この版画は、ヤン・ブルーゲル(1568-1625)の原図による銅版画(図12)だということが最近判明。主題は聖書の話に基づいた「良きサマリア人」(1610年)。風景画ではなく宗教画である。佐竹曙山による「湖山風景図」は、小田野直武

が所有していたこの「良きサマリア人」の銅版画の構図を借用し描いたものであると推察される。

図11 佐竹曙山筆 湖山風景図 秋田市立千秋美術館蔵



図12 ヤン・ブルーゲル原図銅版画 良きサマリア人 英国博物館蔵



この小さい作品「湖山風景図」の中で注目したいのは曙山使用の蘭語印(図13、図9①)。「曙山画」と書かれた署名の左側に大きく朱印で押されている。小さい風景画だけにこの蘭語印のサイズが異常に大きく、違和感さえ覚える。実際平福百穂も短歌雑誌『アララギ』大正15年1月号に次の短歌を発表している。

丹念にゑがきける絵に落款の曙山とおおきく
おらんだ文字のいん

図13 曙山使用蘭語印 Segutter vol Beminnen



丸い円の中に三行にわたってSegutter vol Beminnenとある。オランダ語の綴り間違いはあるが、その意味は平福百穂の解釈によると「至愛の海神」。しかし、この意味がわかると再び不思議な気持ちになる。一体どうして曙山は「至愛の海神」という蘭語印を愛用したのであろう。

平福百穂は「曙山が藩政に深く心を用いたのも至愛のなせる業」と解釈している。想像の域を出ないが、著者にはこの丸く小さい蘭語印の中に曙山の進取の気質をもつ藩主としてまた武士としての秘めた理想像また情熱が全て隠されていそうな気がする。

5 江戸時代の視覚革命と博物学フィーバー

秋田蘭画の小田野直武、佐竹曙山はどのようにして日本の西洋風画の先駆者と成りえたのだろうか。まず、江戸の文化は常に目新しいものを求めていた。望遠鏡や顕微鏡などの光学機器が輸入され、視覚革命が起こった。また、当時の日本の最先端に行く文化人は多くの舶載書を集

め、それが刺激を与え、博物学の隆盛を招き、日本美術にも多大な影響を与えた。

18世紀は東西を問わず博物学の世紀。当時の生き生きとした好奇心や科学的知識欲は博物学フィーバーとまで言われる。ヨーロッパでは18世紀までに、知識人向け専門書から一般向けの啓蒙書までが各言語に翻訳され出版された。実際、動植物の採集、収集、飼育や栽培、また新種の発見、実地調査をおこない、叙述し、体系付けを行っている。採集などに夢中になり生涯をかける人も続出した。

日本でもしかりである。江戸後期は、本草学、物産学、地誌、園芸と博物学フィーバーの時代となる。その広がりには各階層職種に及び、藩主、藩医、市井の学者、商人、地方の豪農までが夢中になった。このフィーバーを代表するは日本のレオナルド・ダ・ヴィンチと呼ばれる程の鬼才平賀源内。個人の資産全てを投じて舶載書を購入し博物学に熱中した。藩主の代表格としては、薩摩藩主島津重豪（しげひで）、熊本藩主細川重賢（しげかた）、富山藩主前田利保（としやす）、讃岐藩主松平頼恭（よりたか）そして秋田藩主佐竹曙山があげられる。武士知識人の蘭学交流サロンと繋がる秋田蘭画の小田野直武の言動も想像できる。純粋な驚きに嬉々とした表情が見えるようである。沸き立つようなフィーバーの中、江戸後期には、例えば詳密で美しい植物図譜が百点あまりも、競い合うようにして編纂された。

この中で、絵画にも博物趣味から創意を得た例が多く見られるのは自然のことだったといえる。江戸後期の絵画は、沈南蘋の花鳥画派（南蘋派）の影響、特に宋紫石に影響も受けながら、ドドネウス、ヨンストンによる動植物図譜の木

版・銅版画の刺激を得て新たな創作へと向かっていく派が時代を先駆けていた。この「博物絵画」が日本の一つの流派を成すまでに発達した。

曙山は日本初となる西洋絵画理論をてがけた。この絵画論を含んだ曙山の「写生帖」は自然科学の「百科全書」といった形態をとっており、項目の順番も平賀源内が題した『百工秘術』の編成を模したような順番になっている。冒頭の二重螺旋階段図も含めて、曙山はこのように博物学フィーバーの中で「百科全書」を創ろうという壮大な構想を抱いていたものと思える。ただ、直武亡き後は曙山自身も絵筆が進まなかったのか、ところどころ白紙のままで残されている。そしてついに完結することなく曙山は短い生涯を終えてしまった。

6 小田野直武筆「不忍池図」の解釈

見たて図か、四季図か、本草学占星術による寓意図か。秋田県立近代美術館にある重要文化財の小田野直武筆「不忍池図」（図14）。見れば見るほど不思議な絵である。贈呈用の吉祥画で、花鳥山水画。線遠近法、空気遠近法、そして陰影法を使い洋風画の代表作とされている。絵の主役は花で、シャクヤク、キンセンカ、セイヨウサルビアが描かれている。この絵の解釈については、いろいろな説があげられてきた。絵の中に描かれたシャクヤクを中国宮廷の美人と比す美人画という解釈。また本草学者の源内と直武との関係に起因する植物の薬効と東西南北、そして四季など慶賀の符号を配した吉祥画という解釈。いずれも革新的な解釈で、鑑賞する為に描かれたこの絵を巡る世界が一挙にひろがった。

図14 小田野直武筆 不忍池図 秋田県立近代美術館蔵



美人画とすると「不忍池図」は東洋のモナリザである。謎めいた微笑を湛えた高貴な美女が空気遠近法を使った清涼感のある池を背景に鑑賞者を見つめる。オーラがある。植物の薬効と方位と季節の組み合わせに関しては本草学など全てに明るかった源内が直武に与えた多大な影響を考えると、非常に興味深く、隠された象徴や寓意がありそうだ。

ここで著者が注目しているのが、源内が購入した舶載書の植物図譜（アムステルダム、1631年刊）。源内はこれを『紅毛花譜』と題した。これはベルギーの植物学者のスウエルツによる560種を掲載した園芸植物のカタログで、手彩色銅版画110枚を収録。源内は宝暦11年（1761）に入手し、自著『物類品隲』（ぶつるいひんしつ）の中のベルレンスブラウの項で、この豪華版の舶載書『紅毛花譜』に見られる鮮やかな青色に特に言及している。

このスウエルツ『紅毛花譜』の扉絵には幾何学模様のガーデン、そして有名な植物学者のクロジウスとドドネウスの肖像画が載せられている。良く見ると源内が全財産を投じて明和2年（1765）に購入したドドネウスの『紅毛本草』

の扉絵にも同様のガーデンが描かれ、植物学者のクロジウスとドドネウスの肖像画が載せられている。ドドネウスの『紅毛本草』の扉絵から創意を得てスウェルツの『紅毛花譜』の扉絵が描かれたのが判る。

図15 1647年版スウェルツ 紅毛花譜 扉絵



源内が購入した『紅毛花譜』は1631年版だが、日本に所蔵されている1647年版の扉絵(図15)を調べると、扉絵は三神のアレゴリー。黄色い緑取りのある王家の印の黄色の百合のような花模様が見られる青のガウンをまとった三日月を持つルナまたはディアナ。オレンジ色の衣装をまとう太陽の顔と弓矢を持つアポロン。その神々に囲まれているのが大地の神ケレス。もしくは花の神フローラ。この女神は赤、白の花々が生けられた花瓶を膝の上に載せ、右手には黄色の鍵

を持つ。淡い紫の衣装に小花模様の白いスカート、藤色と黄色のガウンを膝に乗せる。三神の白い肌が引き立つ。背景はヨーロッパスタイルの典型的な幾何学模様のガーデン。良く見ると左上の空から春を告げる西風の神が頬を膨らませて風を吹き、様々な色の花が一条の光のようにガーデンに降り注いでいる。花の園の寓意と言える。ボッティチェリの「春」の寓意画の流れを汲んでいる。

小田野直武の「不忍池図」の中の三種類の花は三神(太陽、月、大地)を表現したと見ることも可能かもしれない。小田野直武は源内宅に住み、数年間の間に『紅毛花譜』を何度となく見る機会があったものと想像できる。具体的にどの花が月で、どの花が太陽、大地とは特定はできないが、この調和を三種類の花で象徴し豊穡そして吉祥を願ったと仮定したい。曙山が海神や天体に非常に興味を示したことを考慮すると、直武の絵の中にも同様に天体や占星術に関わる寓意性があるのかもしれない。

7 おわりに

秋田蘭画のミステリーを追いかけて、ワクワクしながら、驚嘆しながら、駆け抜けてきた。謎の多い分野には時には奇想天外な発想も必要で、思いもかけないような繋がりを発見することもある。私の想像の産物にしか過ぎないことを承知で、地球また天体との交信を楽しむことも秋田蘭画の楽しみの一つとしたい。「世界の中の秋田蘭画」の位置そして意義を追いかける旅は路半ばである。ミステリーを追いかけた果て、次はどの地に辿り着くのだろうか。